

## 星は光りぬ

E lucevan le stelle

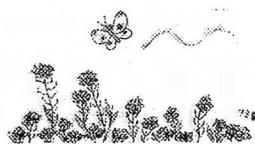
プッチーニ作曲オペラ「トスカ」第3幕で、まもなく銃殺される画家カヴァラドッシが明け方の星にトスカとの愛を思い、心乱れ感極まって泣き伏す。心情吐露が前面に押し出されたヴェリズモ（真実主義）・オペラ特有のアリアの名曲である。

イタリア語(原文)

E lucevan le stelle ed olezzava la  
terra,  
stridea l'uscio dell'orto  
e un passo sfiorava la rena,  
E ntrava ella, fragrante,  
mi cadea fra le braccia.

Oh! dolci baci, o languide carezze,  
mentr'io fremente le belle forme  
disciogliea dai veli!

Svanì per sempre il sogno mio  
d'amore.  
l'ora è fuggita,  
e muoio disperato ! e muoio  
disperato !  
E non ho amato mai tanto la  
vita, tanto la vita !



(和訳)

星は輝き、大地は芳しく  
菜園の扉が軋み、  
砂土に軽く触れるような足音がして  
彼女が芳香を纏って入ってくる

ああ、あの甘いキス、  
誘うような抱擁  
震えながらヴェールをとり、  
彼女の姿を露にした！  
僕の愛の夢は永遠に無に帰した。  
時は過ぎ、  
絶望の中に僕は死ぬ、絶望の中に  
僕は死ぬ。  
今ほど命を恋しく思うことは  
なかった！

## 君死にたまふことなけれ

与謝野晶子/詩

与謝野晶子が、日露戦争に従軍した弟を案じて発表した作品。政府批判を思わせる内容に波紋が広がったが、晶子は「これは自分の自然な感情である」と道理ある主張を貫いた。

あゝおとうとよ、君を泣く、  
君死にたまふことなけれ、  
末に生まれし 君なれば  
親のなさけは まさりしも、  
親は刃をにぎらせて  
人を殺せと をしへしや、  
人を殺して 死ねよとて  
二十四までを そだてしや。

堺の街の あきびとの  
旧家をほこる あるじにて  
親の名を継ぐ君なれば、  
君死にたまふことなけれ、  
旅順の城は ほろぶとも  
ほろびずとても 何事ぞ、  
君は知らじな、あきびとの  
家のおきてに 無かりけり。

君死にたまふことなけれ、  
すめらみことは、戦ひに  
おほみずからは 出でまさね、  
かたみに 人の血を流し、  
獣の道に 死ねよとは、  
死ぬるを人の ほまれとは、  
大みこゝろの 深ければ  
もとよりいかで 思されむ。

あゝおとうとよ、戦ひに  
君死にたまふことなけれ、  
すぎにし秋を 父ぎみに  
おくれたまへる 母ぎみは、  
なげきの中に、いたましく  
わが子を召され、家を守り、  
安しと聞ける大御代も  
母のしら髪は まさりぬる。

暖簾のかげに 伏して泣く  
あえかにわかき 新妻を、  
君わするるや、思へるや、  
十月も添わで わかれたる  
少女ごころを 思ひみよ、  
この世ひとりの 君ならで  
あゝまた誰を たのむべき、  
君死にたまふことなけれ。